

**同窓会会報**  
第13号

昭和45年9月20日  
発行所 茨城県東茨城郡内原町5965  
鯉淵学園同窓会  
印刷所 朝日ばらきタイムズ社

## 学園長に秋浜浩三先生就任

### 鞍田前学園長は名誉学園長に

今年三月末の農民教育協会理事会で、昭和二十三年末、副学園長・学園長として学園教育に尽力してこられた鞍田先生の勇退が決まり、四月二日の緊急教授会で、協会・池田常務理事からその旨公表された。また同時に、名誉学園長制度

(終身)を設定して鞍田先生にお引受けいただいたこと、新学園長が就任するまで、石橋副学園長が、学園長代理として学園長職務を執行することも併せて報告された。一部の教職員からは、学園長任期の中途でもあり、特に、新制度発足にあ



秋浜学園長(図書館前)

たって、突如として発表された。今般の処置は、甚だ遺憾との表明もあったが、とも角、一日も早く新学園長が就任し、学園教育に祖國改善を米さめよう努力されるよう池田常務に申入れた。

しかし、学園長の空席は長期化し、七月には、学園教育の整備充実、なかならず在学生の心情不安定を憂いた同窓会は同窓会々長、支部長会議々長の名で、農民教育協会会長宛、新学園長の任用を緊急に実現されるよう、要請書を提出、八月末の理事会で、秋浜浩三先生の就任(九月一日付)が決定することとなった。

## 第二回全国支部長会議

七月四日・五日両日に開催

学園長に決った秋浜先生は、青森縣出身、昭和三年北海道大学を卒業され、関東・近畿・九州・北陸・北海道等で長年月農林省の試験場に勤務され、新品種の育成を中心に幾多の研究業績をあげられた。北陸・北海道では十八年間にわたり、場長の要職にあり、また本省の研究部長や計画部長も歴任され、現在は財団法人・日本特産農産物販協会の理事長として活躍されている。従って週二日程の来学となろうが、在学生・教職員、そして我々同窓生は、新学園長に対し満額の信頼と期待を寄せている。

全国各地から、多量な中を万障離合せで参集された支部長及び役員の方々、在学生代表五名も加わって総勢四〇名、七月四日午後から五日午前中、支部活動の強化方策・学園の将来計画・同窓会報の発行計画を中心議題として、熱心な討議がなされました。また四日夜は、鞍田名誉学園長や石橋副学園長代理、近、新井、白田、秋川、内藤、阿久津、宮島、藤田の諸先生のご臨席をいただき、文字とおり師弟ヒザを交えての和やかな懇話会が夜おそくまで催されました。次に会議の概況をお知らせします。

### 一、支部長会議概況(その一)

午後一時、新館四番教室で開会、和田

会長の挨拶に続いて、石橋学園長代理から来賓として祝辞、また三カ年制への移行、鞍田学園長の辞任等、学園の近況についてのお話がなされた後、本会議々長として和田会長を選任し、二時から実質審議に入りました。今回は第一回の会議が報告に終始した反省に基づいて、概力報告を簡略にし、出来るだけご参集の支部長各位のご意見をお伺いする方針で進められました。従って、本部事業及び会計報告は、予め印刷送付してあった資料参照というところで省き、各支部の状況報告から入りました。

(1) 各支部の状況報告並びに支部活動強化方策  
全般的に支部総会は年一回、戦場または近在のグループの会合はしばしば開催

しているようです。支部長の下に事務局長、各地域毎の幹事などを設けて、県内全体を組織的にまとめている茨城・栃木支部等。グループの会合はしばしばやって来たが、近々中に久々の総会。鯉淵っ子の集い。を計画している秋田支部、これまでは余り会合を持てなかったが、帰って早速に組織づくりをしたという埼玉・愛媛支部など、それぞれ事情は同じではありませんが、支部活動の強化方策も併せて、積極的な意見を伺いました。

### (2) 鯉淵学園の将来計画

事務局からこれまでの経過を簡単に説明した後、平山常任委員会から、茨城県・栃木県その他多数の都府県農業改良課(普及教育課)が、農林省に設立を要請している「農村指導員養成所・普及員大学校」の設置についての報告があり、でき得れば鯉淵学園の教育方針を変更しないことを前提とし、学園の委託事業として引受け、本科教育を財政面からも教授陣容の面からもバックアップ出来ないかとの提案がなされました。農村指導員養成所設置のねらいは、農村指導員の質向上にあり、具体的には、学園の本科二カ年修了者、他の短大卒以上のものを一学年一五〇名入所せしめ、二カ年の教育(新制大学三〜四年程度)を施し、また現職教育をも実施しようというものです。本題については、特に活発な質疑がなされ、学園の教育方針、財政問題、教授会の意向、在学生の意見等も話題になり、普及事業にたずさわっておられる

部長からも情勢分析が提出されて、長時間にわたって熱心な審議が続けられました。しかし学園の事情もあり、農林省の情勢も刻々と変化していることでもあり、基本的には学園の発展を期すことが出来るよう、本部役員に一任されることになりました。

(閉会予定時刻も既に過ぎ、かつ主要議題が残されたため、会議予定を変更し翌五日午前八時三十分からの学生との懇談会をとりやめ、延長会議にあてることに決定し、第一日を終了)

### 二、支部長会議概況(その二)

午前八時三十分、昨日に引続き審議に入りました。

#### (3) 鯉淵学報の発刊について

平山常任委員から次のような主旨、執筆予定者、予算について説明があり、続いて特に予算面について長時間検討されました。その結果、学報の発行は企画通りに進め、有償配布については特に支部長にご尽力いただくことに決定されました。

#### (4) その他

学園長の問題も話題になりましたが、前学園長辞任のいきさつも明らかでない様子。また後任学園長についても目下空席のままになっていますが、人選については農民教育協会・東畑会長に一任され、教授会でもその縁で具体的な対策は何ら行っていないという報告でした。これに対し同窓会では、今回の支部長会議の名で、後任学園長の人選を早急に進

めるよう、協会に要望することで、午前十時四十分、本会議の全日程を終了致しました。

### 参加支部長(代筆者を含む)

支部名	氏名	期
岩手	小川 昭伍	5
秋田	広島 実	4
福島	佐藤 忠司	4
茨城	小泉 真吉	4
栃木	湯沢 隆夫	1
〃	梶並 精一	1
〃	篠原 要一	10
埼玉	奥沢 繁雄	2
東京	山下 耕一	7
神奈川	山口 次夫	1
富山	深山 一雄	16
山梨	小林 正巳	5
長野	小林 道男	4
静岡	山下 勇	1
三重	花井 巳代治	5
京都	杉原 精一	3

### 三、参加役員

和歌山	早田 仁	1
広島	石田 一成	19
山口	梅下 巖	2
香川	竹内 克	2
愛媛	大西 正章	1
会 長	和田 文雄	3
副会長	石井 隆夫	4
常任委員長	桜井 昭利	2
常任委員	平山 嘉夫	5
〃	田中 茂秋	8
〃	梅崎 孝臣	13
〃	青木久良子	16

事務局員一同(学園在職卒業生)

## 鯉淵学報のあらまし

ることになりました。

### 二、掲載内容

農業指導、行政、研究の報告、優良事例、資料等で農政と指導現場の触媒となるようなもの。

### 三、体裁 B5版 横書き、一〇〇頁

### 四、発行部数 二、〇〇〇部

### 一、発刊の主旨

鯉淵学園は、創立以来二十五年を迎え、本年度から三年制を施行することになりました。このときわれわれ同窓会として、さらに学園に対する援助を強め、母校の発展を期したいと思えます。その一つとして鯉淵学報を発刊す

五、発行時期 創刊号 昭和四十五年十一月一日

第二号以後は季刊とする

六、発行者 鯉淵学園・同窓会

七、編集委員 和田文雄、石井隆夫、市川俊次郎、西村典夫、平山嘉夫、張替誠一郎、砂田義雄、前田俊英（庶務担当）

創刊号執筆者一覽

（○印確定 ※印依頼中）

テーマ 執筆者

原稿枚数（四〇〇字詰）

（論説）  
発行にあたって ○和田 文雄

発行に寄せて ○石橋 幸雄

農村指導者の養成のあり方 ○学園長代理 10

農村社会（題未定） ※田所 朋

農業白書英語訳 ○農林省普及部長 20

（経済・経営・技術・普及・事例・統計）  
果樹（題未定） ※岡 千里

農業経営構造調査のゆらいと結果の利用法 ○学園教授 20

（農林省・3期）20

農場の実験的経営(1) ○砂田 義雄

（学園教授・5期）20  
青果物流通センターの意義 ※川野 博正

（全版連・5期）20  
青果物出荷の共販共運体制と市場 ※宮下 俊文

（全版連・6期）20  
畑作機械化体系(1) ※那須野 章

（東北農試・5期）20  
第二次構造改善事業に役立つ基盤整備のポイント ○根岸 久雄

（土木試験場）20  
総合実験農場の考察 ○中村 恵一

（農試・4期）20  
新しいみかん栽培技術 ○早上 三男

（熊本県専技・4期）20  
田植機による稚苗植と成苗植の問題点 ○渡辺 正信

（茨城県農試・7期）20  
生活近代化の処方箋 ※阪備 陸子

（宮崎県専技・8期）20  
後継者の経営参加と経営発展 ○久保 良雄

（中国農試・2期）20  
総合農政下における水田地帯の普及

全国支部長会議に出席して

秋田県支部長 広島 実（4期）

謹啓 七月四、五日の全国都道府県支部長会議の際には、大変ご厄介になりました。昭和二十四年春、学園を卒業して以来二十一年ぶりの、卒業生としては初めての学園訪問でしたが、学園の教室や寮等の設備や特に道路ですが周辺の状況は大きな変化がみられましたが、先生方の大部分は二十余年以前とあまり変わらなかつた。昔ながらの若々しさと親切と愛情をもっておつき合いたたき、私もいついそがしい在学当時の気分を出してしまつた次第でした。

予算案（1回分）

収入	1,800部×250円	450,000
販売		102,000
合計		552,000
支出		
(1)印刷費	2,000部×150	300,000
(2)送付費	2,000部×65	130,000
(3)封筒	2,000部×3	6,000
(4)原稿料	20人×1,000 （卒業生） （卒業生外）	50,000
(5)編集費・旅費	3回×20,000	60,000
(6)取材・その他	2回×3,000	6,000
合計		552,000

支部長会議では、専らお話を承って学園や同窓会本部の現状を知り、帰って支部長に伝える役目ではありましたが、非常に沢山の、しかも重要な問題に直面していることを共に、学園の諸先生や同窓会本部役員の方々が学園の発展を願って真剣にそれらの問題に対処し、取組んでおられることを知り、ただただ頭のさがる思いでした。

社会人として職についてしまいましたが、仕事によって差はありましたが、私の場合はなかなか時間をさいて母校を訪れる機会をつくれなかつたのですが、同窓会本部の方々の配慮でこの度のようないお陰で、第二の故郷、鯉淵の地を踏むことが出来、本当に心あたたまる思いでした。厚くお礼申し上げます。

二十余年前を目で、耳で、そして足で再現して得た感激は、今後しばしば懐かかった思い出として脳裡に浮かび出ることと存じます。

さて、七月十八日（土）に秋田県在住の鯉淵っ子の集いを開き、先般の支部長会議の概況を報告し、談合し、親睦の度を深めました。左手と、はしを動かさぬ前に話し合った点の要目をご連絡いた

します。

なお、出席者は十八名で通教生を除くと三人に一人の出席率で今までの最高の集まりでした。

(本部関係事項協議要旨)

(1) 鞍田前学園長謝恩募金について、全園支部長会議での説明・討議内容を報告し、色々事情があるようだが、なが年学園の発展にご尽力されてこられたことであるので、皆んな一口でも二口でも応募しようと話す。

なお、支部会参加者の分を全部取まとめて……という取扱いは半強制となつて、次回以降の会の出席率低下、支部活動の不振をまねく恐れがあるので、あらたまって取りまとめることはしない。ただし、自発的に一緒にやってくれということであれば希望に応ずると説明。懇談後酔からさめたら数人分集められておつたので、小生分を含めて七名分十四口七、〇〇〇円を別送しました。

(2) 鯉淵学報の発刊について、本部の企画を説明、その結果よい試みである発刊には異議がない。しかし、片手間で年間四回の季刊は無理があるのではないかと。購読についても年一回ないし二回程度を期待するという参加者の多数意見であった。

(3) 本部会費納入について、私は、支部の会合が本部会費未納者に対し督促する会であつては支部活動はすたれる。だから集金するということを強制はしない。しかし、本部の台所も菜では無い。

ようだから、未納者は極力早目に納入するように心掛けていただきたい……と語りかけただけ。概況は以上のとおりです。

取敢えず用件かたがた先般の支部長会のお礼を申し上げます。学園の発展を祈ります。諸先生にもよろしく。敬白

### 福島県支部長代理

佐藤 忠 司 (4期)

二十一年振りの学園、本当に懐しく感じました。さらに古き友に会えて、ただただ昔を偲ぶばかりでした。永く学園の

## 支部だより

### 兵庫県支部

福垣 道 男 (12期)

同窓会事務局も少ない陣容で、しかも多忙な業務の中でやっておられる様子、本当に感謝に堪えません。近いうちに開催予定の支部総会には支部長会議の内容を伝達し福島県人一同の奮起を期待したいと考えております。本当にお世話様でした。健康第一に頑張ってください。 草々

三月末、おかれていた四十五、六年度の同窓会費をやっと払いこんだら、立派な領収書が封書で送られてきて、その中には西村局長より事務局の繁忙なこと、農協科の廃止、三年制でのスタートのことなど学園のよう変りについて触れられた書信が入っており、最後に会報に何か書けとの指示で結んであった。

どうも多忙な研究教育生活の中で、同窓会本部の切りもりを担当して下さっている局長の指示とあれば、こちらも多忙を理由としてお断りすることはできない。くらしいのエチケットは心得ているつもり

繁栄を願うのみです。

日本農政がきびしい立場にあると同じように学園もまた、学園長の問題や施設の充実等、幾多の悩みはありますが、教授会、学生そして同窓生が一丸となって乗りこえるよう、努力をいたしましょう。

兵庫県農業振興協会常務理事(会長は農林部長だから、協会ではこれ以上に出ることはできない地位、月刊誌「経営と生活」の刊行を主業とし、その他県内農村向けの図書資料を編集出版して正に情報化時代の尖兵をもって任じておられる。この頃は頼まれて県内農業関係各種の研修会の講師として引張り風でもある様子、温客でデリケート、全く風貌は学者そのものといつてよろしかるべく。事務局長加藤整氏(十期)岩波文化の優等生でまじめそのもの、彼の書齋は格のある一流の書物でぎっしり、いつも陳列具の手配がおくれるらしく、百科辞典など大冊が横積みになることしばしばである。どうも小出先生流の濃厚感染らしい。現在農協協中央会の教育広報部在籍、職員教育のエキスパート、明石市魚住町(山陽線に魚住という駅ありその近く)にある農協講習所の教務担当(学園の教務課勤務歴があるので、うってつけの人事(私どもの参事のニクい人事の最たるものと云えよう)十年選手で温客、講習所職員の筆頭として担当教科目は「農協概論(農協史)」と「農協事業総論」だが、ハイクラスの二種、三種職員に対しては「農産物流通論」を講じ、自ら農産物流通問題の専門家を目ざしてはり切っている好字の士。

なので、モチーフもないままとも角にもメンを執つた次第。  
「同窓会報」であるからには、個人の徒らな雑感よりも同窓の動静に関するものの方がせつかくのスペースを充すにふさわしいと思ひ定めてその方を少し。  
兵庫県は大県(？)北は日本海から南は瀬戸内海をはさんで淡路島の向うは太平洋であることはご存知の通りで、私どもの所属する農協中央会の文書等にも農業の変ぼうの状況などが「まさしく全国縮図」といってよく「などと書かれたりする。この県の支部長栗山氏(二期・賛)

講習生に対する訓育も一面きびしく、在職一年にして講習所は面目を改めつつあり、温厚であるにかかわらず、中央会仲間から「鬼の加藤」などと呼ばれる。確実な職務の執行ぶりについてゆけぬ職

員から発せられる嘆声のようなものである。

この講習所は昨年一年は同所出身の気鋭の同郷長尾舞夫氏(二十四期)が卒業と同時に配属され、講習生の見習いとして寮生活を指導しつつ加藤氏を補佐してきたが、この二月の人事で、さらに昨秋農協監査士資格を取得した近本恭三氏(十五期)が淡路支所から赴任、第一線での経験を活かして講習所では「簿記」を担当する。このように「兵庫の農協職員教育のメッカ」に三人の同郷が集められてしまったが、この発想の根拠は残念ながらまだ審らかにしていない。いずれにしてもあとは事務の女子職員と前の小母さんで、担当部長は神戸とカケ持だから、全く以って本農協職員教育の本山は同郷で固められてしまった。万博で大阪へ来られた同郷の方でヒマと興味のある方は、「一寸のまかれると実態がはっきりするし、歓迎(?)の覚悟は三人ともある」と懸念している。

さて、兵庫農協は大勢なので、点在する同郷生が仲々集まれる欠点がある。何しろ、端からだと急行の乗物で県都まで四時間半もかかることになるため、企画の方も大変だし、出て来る方も大変だとなり、一度一度といながら、事務局長が事務繁忙のため、支部大会は開かれぬ始末になってしまっている。

忘年会をかねた発会式が四十年の暮れにあり、翌四十一年には神戸六甲山上で近畿プロクツクの大会が開かれたあと、支部大会は伸びのびになったままである。

しかしこれを補完するように県支部の中に地区(?)組織がある。かく申す私が所属している兵庫農支部但馬地区同郷会であり、傘集範囲を電話でカンタンに連絡のとれる程度にし、四十三年、四十四年と新卒業者の歓迎や、年末年始消息情報交換の会をワリカンでやっている。

中央会の話ばかりで恐縮だが但馬支所に十二期の福田道男と二十期の柴垣仁司氏と二人いるので連絡の中心になりやすい。

十五期以降の同郷生が多いのと、男女の差がそれ程開かぬので、集まればにぎやかである。常連の近況を紹介したい。十五期の中島明子氏、生改十年選手で独身の同郷生として組的存在、家付娘でご亭主は入婿とされているので届託がない。農協の悪口をいわれるとつい腹が立つので、電話でおさまらぬ時は面談を強要するが、「これでも最大の理解者のつもり」と逃げる返りでチョンになっている。農園普及所勤務、但馬文教府という妙な機関があるが、その生活科学センター初代の担当をこなした。

十九期長峰年正氏も農園普及所の農協指導員で第一線、正直な人で最近「農政のいい参考書がないか」というので、理由を聞くと、婦人部で教員出身の元氣なオバさんに農政の問題をきかれたが返答ができなかったとのこと。

二十期岩本佐知子と中島氏とバトントンチで生活科学センターについて好評であったが、現在は和田山普及所で生改勤務、生活の問題は所得や経営につながる

ので畜産経営の分析などがカンタンにできぬものかと、簿記でもやらんずる勢いである。非常勤畜産コンサルタントの委嘱命令だけはまだ返していない。小生、話に乗らざるを得ない。あととり娘なので好例を配するの要あり。

二十二期高木経吉氏、八麻町農協勤務、支所から現在本所、農協科出身で経理などは手なれたものであろうと思うのに、且下名伯樂なく能力発揮の機会が与えられていないのが、いささか残念である。

二十三期田中路子氏と生改勤務いくばくもならぬ内に見定められて農協経営者たる大路氏と結婚、この程めでたく愛息をもうけ産休もあけて、農園普及所に若いママ普及員として勤務。

二十三期森友枝則氏も農協科出身ながら但馬町農協へ勤務して二年、指導員に配属され、営農指導の道を歩ませられているかに見えていたが、四月二十四日付の人事で管理課へ、マイカーでブツ抜ぼすことを得意とし、指導員として広い範囲へ出くせが付き、管理で専ら伝票・計数と対決する生業に耐えられるかとチヨッピリ不安をもらしたが「農協」「結実」両誌精読に努める由。

二十三期田中久隆氏も目下兼業農家、畜産専攻で肉牛の多頭飼育により規模拡大をめざし、張り切って青写真を描いたが、畜舎建設用地として予定した田地が土地改良事業対象地として転用規制を受け、農委に百度謝りしたがO・Kにならず、計画に電撃をきたした。近くに

工場が進出しており、彼は可能だと判断したのに、それが実は基準違反で行政担当者の上級官庁から油を絞られ「職工法」の關係で政治解決をしたあとだけになますを吹かれた形。農協会議・農村部に直訴を応援しようかなと口添えしたが、議員な彼は結局市役所吏員の面子をたてて、一応引込んだ。一・七ヘタターの本田は単作なので余剰労働の態様を農園市内の契機業を手伝うことよって果している。青年団活動のリーダーでもあり教委の国内研修に参加したり、小生の事務所への出入も最頻で女子職員ともすっかり馴染みになっている。

二十四期松井英子氏も農園普及所勤務、生活指導員として二年目を迎え、最近先輩がいなくなり、一人立ちせざるを得なくなった。海子山千の婦人部のオハ様方、八方美人の経営者に接して、理想と現実の乖離になやみ、大分ドキドキしただしいが、徐々に馴れつつある。近郊(都市)的農協では組合員・家族の階層・利害が著しく分化するので、現象対応で追いまくられるもの。「生活指導車」に乗って賑々たるときもある。事務所が小生と同じビルになったため接触が増えた。

以上名簿の順を追って接触した範囲の従って責任のもち得る紹介を試みたが、いよいよ身辺を告白せざるを得ない。

二十期柴垣氏も中央会本部一年の勤務を経て郷里の但馬支所で在職四年、この間懸まざる勉学の志が突って、中央会動

また、会期日まで。  
昭和四十五年六月

### 第24期同期生誌『純生』及同期生会準備会計報告

昭和45年3月20日 千葉県人一同 代表 加藤成一

1. 収入の部		2. 支出の部	
借入金 (同窓会より)	20,000	借入金返済	20,000
借入金 (200部)		借入金代	35,000
売上金		郵便切手, 封筒, その他事務用品	9,768
500円券 × 92部	46,000	電話, 出張旅費, その他通信費	8,541
400円券 × 4	1,600	編集会費 (委託料)	6,591
300円券 × 96	28,800	販売手数料	1,200
(寄贈8部)		同窓会通信連絡費	4,300
	96,400	支出金計	85,400
内未収金		残金	10,000
・平田, 藤沢	1,000	未収金	1,000
収入金計	95,400円	次回同期生誌運用資金	11,000

## 25期生会誌発行！ 発起人会開かれる

さる七月十八日、学園来賓宿舎に於いて、同期誌発行についての発起人会が茨城県内に在住する同期生十二名によって開かれた(うち女子一名)。

事の発端は、先だって派手研修生とし

て旅立つ仲間を見送ったとき同期生同志の連絡がよくとれず、だれがどこでなにをしているのかさっぱりわからないうちに、集まった数名が話しあっているうちに、「なんとかしなくては」ということになり、県内在住の同期生三十名に呼びかけ発起人会の開催となった。

発起人会では活発な意見がだされたが、要約すると発刊にあたって、まずは「最初の困難な段階は初期の若いエキスギーとみんなの協力でのりきろう」「事務局を作物保護研究室に設け、以後、ここを本拠として連絡しあうこと」「事務局のメンバーは河内(組合科専攻生)、宇儀(農業科専攻生)、鹿島(畜産科)高橋(農林省機械化センター)「編集には加藤(石下町農協)、会計として、鈴木、三浦(国際農業センター)が当たること」、それから全職に対する監査は、発起人全員であらうということになった。

だが決して問題がないわけではなく、第一資金をどうするかということについてかなり論議された。しかし、当分は各方面からの好意にあまんと、最終的には、各人が負担することになった。「仲間運はさきと、オレ達の気持をくみと。てくれるさ」と、いう意見が、この問題に終止符をうたせた。

この会の後は仕事のこと、恋人のことなど、夜のふけるのを忘れて話に花を咲かせたのは、やはり「心の里」としての開演の月の明かるさのせいだったかもしれない。

全国の友よ、絶大なる協力をお願いします  
致します(発起人一同)。

## 学園通信

### 農村生活科を生活栄養科と改称

今年四月に入學した本科学生から、三年の課程を履修することになり、科目・時間数などについてもかなりの変更が見られる。とりわけ、農村生活科は二月二十七日付で、正式に栄養士養成施設として認可(厚生省告示第四八号)され、卒業すれば栄養士の資格が取得できることとなった。認可にあたっては車畑精一会長のご尽力があり、関係各位の理解と協力によって、異例のスピードで実現することとなったが、一方、名称は生活栄養科と改められることになった。

### 教授陣容、諸設備の充実

三カ年制度のスタートにあたり、最も重要な事項であるが、財政と直接に結びつくものだけに最も苦慮している。新設科目もできるだけ現在の教職員で分組することを取崩し、特定の科目については非常勤講師に依存することとし、選擇は栄養実験担当や公衆衛生等、二・三年の科目に限られた。設備としては、臨時実験室(旧教室の一部)に約三十万円、食品加工実習室(旧購買部、一時被服実習室として使用したこともある)に約九

十万円を投じて改造、基礎実験、栄養実験、食品加工実験などに五百八十万円に近しい緊急整備費をかけ、特に実験実習科目の整備充実が力が傾注されている。一つ一つ不可欠品としてあげられたものを見ると、そんなものもなかったのかと今さらあきれやもわかりませんが、学園としては清水の舞台からと降りるような気持ですすめたことも察して欲しい。

現在も緊急整備に全力を傾けており、すでに新男子寮(四十名収容)の建築が始まり、四十六年には女子寮、同じく基礎実験室の建設計画がすすめられている。

### 四十六年度、学外実習について

新制度の特長の一つとして従来からの学内実習の外に、学外実習が加えられた。実施要項の大筋は、

1. 学外実習の対象と期間：農業科二年生・昭和四十六年七月二十五日から八月末日までの期間のうち二十日間(以上)。
2. 目標：各地の優良農家や団体、機関等での実習を体験することにより、学内実習で得がたい面を修得し、広い視野にたつて今日の農業技術の進歩や異色ある経営の実態を学び、新しい農業者としての能力を高めさせる。
3. 実習先：去年度は初年度であるので、関東・静岡・長野等範囲の農村青少年受入農家又は研修受入機関の名簿の中

また、会う日まで。  
昭和四十五年六月

第24期同期生誌『純生』及同期生会準備会計報告  
昭和45年3月20日 千葉県人一同 代表 加藤成一

1. 収入の部		2. 支出の部	
借入金 (同窓会より)	20,000	借入金 返済	20,000
売上金 (200部)		製本代	35,000
500円売 × 92部 =	46,000	切手、封筒、その他事務用品	9,768
400円 × 4 =	1,600	電話、出張旅費、その他通信費	8,541
300円 × 96 =	28,800	編集会費	6,591
(寄贈8部)		販売手数料 (委託料)	1,200
		同窓会通信連絡費	4,300
	96,400	支出金計	85,400
内未収金		残金	10,000
・平田、藤沢	1,000	未収金	1,000
収入金計	95,400円	次回同期生誌運用資金	11,000

25期生会誌発行  
発行人会開かれる

さる七月十八日、学園米寄附会に於いて、同期誌発刊についての発行人会が茨城県内に在住する同期生十二名によって開かれた(うち女子一名)。

事の発端は、先だって派米研修生とし

て旅立つ仲間を見送ったとき同期生同志の連絡がよくとれず、だれがどこでなにをしているのかさっぱりわからないと、集まった数者が話しあっているうちに、「なんとかしなくては」ということになり、県内に在住の同期生三十名に呼びかけ発行人会の開催となった。

発行人会では活発な意見がだされたが、要約すると発刊にあたって、まずは「最初の困難な段階は同期の若いエネルギーとみんなの協力でのりきろう」「事務局を作物保護研究室に置き、以後、ここを本拠として連絡しあうこと」「事務局のメンバーは河内(組合科専攻生)、小俣(農業科専攻生)、鹿島(畜産科)、高橋(農林省機械化センター)「編集には加藤(石下町農協)、会計として、鈴木、三浦(国際農業センター)が当たること」と、それから全般に対する監査は、発行人全員であらうということになった。

だが決して問題がないわけではなく、第一資金をどうするかということについてかなり論議された。しかし、自分たちは、各人からの好意にあまんに、最終的には、各人が負担することになった。「仲間達はきっと、オレ達の気持ちにくみとってくれるさ」と、いう意見が、この問題に終着符をうたせた。

この会の後は仕事のこと、恋人のことなど、夜ふけるのを忘れて話に花を咲かせたのは、やはり「心の風」としての別れの月の明かるさのせいだったかもしれない。

全国の友よ、絶大なる協力をお願い致します(発行人一同)。

学園通信

農村生活科を生活栄養科と改称

今年四月に入学した本科学生から、三年の課程を履修することになり、科目・時間数などについてもかなりの変更が見られる。とりわけ、農村生活科は二月二十七日付で、正式に栄養士養成施設として認可(厚生省告示第四八号)され、卒業すれば栄養士の資格が取得できることとなった。認可にあたっては東畑精一会長のご尽力があり、関係各位の理解と協力によって、異例のスピードで実現することとなったが、一方、名称は生活栄養科と改められることになった。

教授陣容、諸設備の充実

三カ年制度のスタートにあたり、最も肝要な事項であるが、財政と直接結びつくものだけに最も苦慮している。新設科目もできるだけ現在の教職員で分担することを原則とし、特定の科目については非常勤講師に依存することとし、新採用は栄養実験担当や公衆衛生等、二・三年の科目に限られた。設備としては、臨時実験室(旧教室の一部)に約三十万円、食品加工実習室(旧購買部、一時被服実習室として使用したこともある)に約九

十万円を投じて改造、基礎実験、栄養実験、食品加工実験などに五百八十万円に近い緊急整備費をかけ、特に実験実習科目の整備充実が力が行注されている。一つ一つ不可欠備品としてあげられたものを見ると、そんなものもなかったのかと今さらあきれやもわかりませんが、学園としては清水の舞台からと降りるような気持ですすめたことも察して欲しい。

現在も緊急整備に全力を傾けており、すでに新男子寮(四十名収容)の建築が始まり、四十六年には女子寮、同じく基礎実験室の建設計画がすすめられている。

四十六年度、学外実習について

新制改の特長の一つとして従来からの学内実習の外に、学外実習が加えられた。実施要項の概すは、

1. 学外実習の対象と期間：農業科二年生、昭和四十六年七月二十五日から八月末日までの期間のうち二十日間(以上)
2. 目標：各地の優良農家や団体、機関等での実習を体験することにより、学内実習で得がたい面を修得し、広い視野にたつて今日の農業技術の進歩や異色ある経営の実態を学び、新しい農業者としての能力を增高させる。
3. 実習先：来年度は初年度であるので、関東・静岡・長野等範囲の農村青少年受入農家又は研修受入機関の名簿の中

から選んで実習を依頼する。但し卒業生の自営者、同普及員や當農指導員のせいせんされる農家については、上記に限定せず、むしろ積極的、優先的に実習を委託する。

4、実習経費：原則として学生負担とする。ただし農家などの場合、できれば実習期間中の食費、宿泊などの滞在費についてはご高配願えれば有難い。

5、事務担当 教務課

以上のような骨子で、教務課ではすでに具体的な作業に入っております。各都道府県の農業改良課、教育普及課とは特に緊密な連絡をとり、ご協力をお願いしなければなりません。卒業生の皆さんにも格別のお力添えをお願い致します。特に直接お引受けしてもよい方、優良受入先を紹介して下さる方、又お氣付の諸点、何かと教務課までご一報下さるようお願い致します。

### 四十六年度、学生募集

次号で募集要項を同封し、重ねてご協力をお願い致しますが、教務課では旺文社その他の雑誌掲載や要覧の印刷など、着々とすすめております。募集人員は農業科園芸コース四十名、同畜産コース四十名、生活栄養科四十名、合計百二十名です。ご子息、ご弟妹はもちろん、お知り合いの方など、ともししおすすめて下さい。

### ◆第三期生の卒業（合計一七九名）

（本科）農業科園芸コース四七名、同畜産コース三三名、農協科四〇名、農村生活科四四名、（専攻科）二名、（選科）二名、（特別選科）自営コース）一二名。

### ◆一期から五期までの卒業生数（合計三、五七六名）

（本科）二、三九一名、（専攻科）五六名、（選科）五九名、（特別選科）九四名、（通信教育）九七六名。但し上記卒業生数は本科と専攻科専科と本科などの二科の卒業または終了者も若干含まれる。

### ◆在學生数

（本科二年）農業科園芸コース四二名、同畜産コース二八名、農協科四〇名、農村生活科三〇名  
（本科一年）農業科園芸コース五七名、同畜産コース三八名、生活栄養科三八名、（専攻科）二名、特別選科二名、（通信教育）一五六名。

### 学園人事異動

採用 川井 光 45・4・1 職員(45年3月次大農卒、栄養実験担当)  
宮島三男 45・4・1 嘱託教授(前学園教授、農協論担当)  
山本平男 45・4・1 職員(44年3月学園卒、園芸農場)  
百武志のぶ 45・4・1 教授(前岐阜女子大助教、家庭管理・被服担当)  
藤田千春 45・6・1 教授(前茨城県畜産試験場長、畜産担当)

川井 光 45・6・1 嘱託教授  
（前茨城県潮来保健所長、公衆衛生担当）  
嘱託教授・久米寿美恵 45・3・31  
教授・杉山 貞 45・3・31（茨城県経済連に転出）

退職 教授・宮島三男 45・3・31（協同組合学園に転出）  
嘱託教授・宮島 貞 45・3・31  
嘱託教授・久米小十郎 45・3・31  
退職 教授・坪野敏美 45・5・1から54・9・30まで、特命休職（日縮実業KK嘱託としてインドネシアへ）

## 二五期生を送る

在校生代表 伊藤 喜代治

心地よい春風は、明るい清らかなメロディーをかたどつて、窓辺の梅の香りを運び、うららかな陽ざしは、深い冬の眠りから覚めよとばかりに、大自然の生物に語りかけている今日のよき日に二年間の雪の功なつて、ここに目出たく御卒業の日を迎えられました諸兄弟姉妹に対して、心からお祝いの言葉を申し上げます。

光陰矢のごとし、私達が入学して、はや一年になろうとしています。生まれて初めて父母の下を離れて、はるばる鮮測の地についた私達を暖かく迎えて下さった入寮の日からの、皆さん方との自治生活は、一瞬目を閉じただけでも数限りない思い出が脳裡を駆けめぐります。

新入生歓迎大会に咽をからし、炎天下、吹き出る汗に顔を見合わせ励まし合った夏期実習、スクラムをくみ大声で祭歌を歌いこけた思い出、秋祭の下、顔を

ゆがめながらも最後まで走った体育大会、また或る時は、夜を忘れて語り明かし、またある時はきびしく怒られたこと等、今となってはただただ懐かしく、惜別の情禁じ得ません。

さて、「時は最も知恵あるものなり」と言われる通り、今日まで必死で陣の講義に耳を傾け、黒板の文字を書きとり時には理解に苦しみ、また試験に頭をかかえた学生生活に終止符を打ち、いよいよ晴れて実社会に出られるわけですが、これまで学び、体得した知識を、能力をひたさげ、自信をもって、社会に体当りして頂きたいと思ひます。二十世紀後半を担う我々の役割は誠に大きいものと思ひます。

しかし、現在の社会状況は、資本主義の急激な発展に伴って、大企業化が進み、貿易の自由化をはじめとする国際化が進みつつあります。一方、極端な過疎





送辞を述べる伊藤苗代治君

まして学園教育の二本柱の一つとして、優れた先達を世に送り続けてきた農業協同組合科が廃止されることは残念でしかたがありません。新しい農業と取組む実践力を身につけた農業者、農協職員、農村生活の指導員の養成を目指して農業科、組合科、生活科の三科一体となって、互いに助け合い補い合って、日本農業に取組み、その発展に貢献してきたのになぜ廃止しなければならぬのか、未だに疑問です。私達の後に組合科の後輩がいないという事なる悲しみではなく、学園の教育が崩れかけるのでは

ないかという不安を抱えておられます。卒業生の皆さんは、こうした学園の大変な変革期に卒業されるわけですが、私達、在校生も先輩の努力を無にすることなく、今後とも学園の発展に努力したいと思えます。思えば昨日まで、学園改革問題で共に涙を流しながら幾日も幾日も徹夜し、論議し日本中の大学から資料を集め学生だけの検討もしてきました。まだ、充分な成果をおさめるまでには至りませんが、先輩にとっても私達にとっても、終生忘れられぬ思い出でしょう。

最後に、在学中、度々美化作業で手入れた学園内の樹木は、日に日に、年々根をはり、枝を伸ばし、幹を太くしていきます。そこで、是非心に残す木を一本探し、それを忘れず育てて欲しいのです。その木は皆さんの第二の故郷の木として、すばらしく育つことでしょう。では、またいつかお会いできる日を楽しみに。あし、我友と握りたるこの手のぬくみ忘れぬや、この心のぬくもり忘れぬや。

現象から都市化に至るまで、進展されりなく、今後の農業、農村の困難な道は固りしれないものがあります。

また、日本経済の高度成長に伴う、他産業との生産性、所得の格差の是正のために、農業生産、生産物流通、またこれに伴う技術革新や食糧供給など、数多くの問題をかかえています。

こうしたきびしい条件の中で皆さんは、新しい農業を創造し開発しなければ日本農業の真の発展を招来することは不可能であると思えます。

昨年の卒業生特集号「開野の巻頭語」に、無知なものであり読書家の方がまさり、読書家より記憶する方がまさり、記憶す

るよりも理解する方がまさり、理解するよりも実行する方がまさり、とありました。まさにその通りだと思えます。今、卒業される皆さんは、実践の時期到来というわけですが、今後の農業改革に、農協運動に中核的役割を果たして欲しいと思えます。

もう一つ忘れ得ぬ思い出を述べられずにはおられません。新しい農業時代を避えるにあたり、ここ学園も二年制からいよいよ三年制に移行します。そのため、今以上に農業者をはじめ農協団体、茨城縣などの御協力を頂かねばならないと思えます。

卒業されると全国各地に散ってしまわれます。もう人によってははや再会を許されぬかも知れません。喜歌も、大声で同を歌うこともできないかも知れません。しかし、卒業される皆さん、学園の訪れる先輩として、いつまでも、どこにいても学園の守護者であって欲しいのです。私達も残す一年間、全力を傾注し学び研鑽を積んで後に続きます。

毎日厳しい暑さが続いておりますがお元気でしょうか。いつも御無沙汰しておりますが、今年より学園も三年制になったとか、一層お仕事の方も忙しくなられて大変でしょうね。今後の学園の御発展を祈っております。お体を大切に下ささい。(鳥取・近藤憲太郎・24期)。

同窓生短信(その1)

暑中御見舞申し上げます。七月二十八日午後一時より、お祭り広場で、ウスイ、タムラ、ユグチ、ナガブチの五人で同窓会をする予定。そして全員で早川君の協賛をしようと思っております。(熊本・合志文夫・22期)。

今後の御活躍と御多幸を心からお祈りしつつ、送別のことばと致します。  
昭和四十五年三月二日

